学生アルバイトにおけるワーク・エンゲイジメントとスチューデント・エンゲイジメントの心理的 well-being への複合的影響

○上原昇馬[1]・＃谷原弘之[2]・山根嵩史[2]
([1]川崎医療福祉大学大学院 医療福祉学研究科・[2]川崎医療福祉大学 臨床心理学科)

大学生の 82.3%がアルバイトに従事する現代において（日本学生支援機構，2024），学業との両立は重要な課題である。従来，役割葛藤理論に基づき，学生の就労は負の側面が強調されてきた（Drăghici & Cazan, 2022）。しかし, Teo et al.（2025）や上原他（印刷中）は就労する学生の良好な精神的健康を報告し，これらの知見は Work-Family Enrichment 理論（Greenhaus & Powell, 2006）を支持する。ただし, 先行研究は就労の有無やワーク・エンゲイジメント（WE）水準に焦点を当て，スチューデント・エンゲイジメント（SE）との複合効果や心理的メカニズムは未検討である。

本研究は，（1）WE と SE の類型論的分析により心理的 well-being（PWB）の差異を検証し，（2）ソーシャル・サポート，承認欲求，セルフ・エフィカシーが WE と SE を介して PWB と関連する経路モデルを検証することを目的とした。

方法

参加者と手続き　2025 年 4-5 月, アルバイトに従事する大学生 222 名を対象に質問紙調査を実施した。本研究は川崎医療福祉大学倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号：24-076）。

使用尺度　(1) S-UWES（上原・岡嶋，2024），(2)日本語版 SE 尺度（登藤他，2016），(3)PWB 尺度（西田，2000），(4)賞賛獲得・拒否回避欲求尺度（小島他，2003），(5)短縮版 SESS（久田，2021；サポート対象：大学の先生，バイト先の上司），(6)GSES（坂野・東條，1986）。

結果

階層的クラスタ分析（Ward 法）の結果，4 クラスタ解を採用した。相乗型（27.0%；WE 高・SE 高），職場専心型（20.7%；WE 中・SE 低），学業専心型（20.7%；WE 低・SE 中），離脱型（31.5%；WE 低・SE 低）に分類された。Holm 法による多重比較の結果，相乗型は職場専心型(p = .002, d = 0.71)および離脱型(p < .001, d = 0.95)よりも有意に高い PWB を示した。

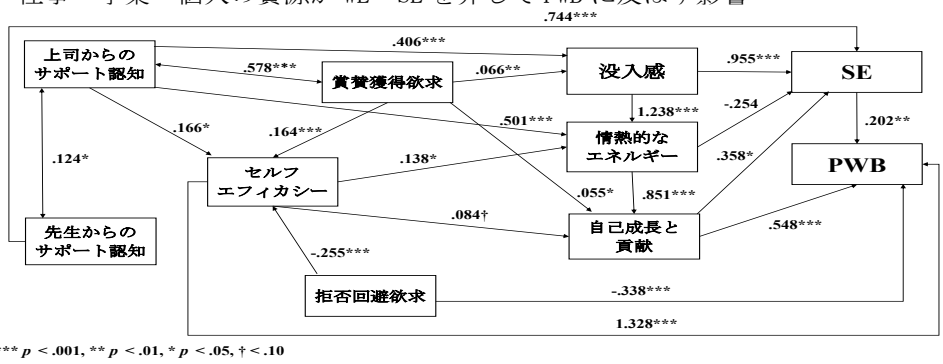
構造方程式モデリングの結果を Figure 1 に示す。モデル適合度は CFI = .999，$RMSEA$ = .016 と良好であった。上司サポートは没入感と情熱的なエネルギーへ直接関連し，セルフ・エフィカシーを介しても情熱的なエネルギーへ関連していた。先生サポートは SE に直接関連していた。WE の構成要素は没入感から情熱的なエネルギー，自己成長と貢献へと連鎖し, 没入感と自己成長と貢献は SE を経由して PWB と関連するとともに，自己成長と貢献は PWB への直接的な関連も示した。

考察

本研究は，WE と SE の両方が高い相乗型が最も高い PWB を示すことを明らかにした。この結果は，役割葛藤理論とは対照的に，Work-Family Enrichment 理論と整合的であり，複数役割への積極的関与が心理的資源を増大させることを示唆している。実践的には，離脱型への支援介入の必要性が示された。企業と大学双方における適切なサポート提供が，役割間葛藤の予防と学業適応の促進に寄与する可能性がある。本研究の限界としては，横断的デザインによる因果推定の制約があり，今後は縦断研究による検証が必要である。

Figure 1

仕事・学業・個人の資源が WE・SE を介して PWB に及ぼす影響



*** p < .001, ** p < .01, * p < .05, † < .10